



写真-1 JR 加古川線・第二加古川橋梁（令和2年5月撮影）

■ 百歳を超えた JR 加古川線・第二加古川橋梁

写真-1 は、加古川に架かる JR 加古川線の第二加古川橋梁を撮影したものです。この橋梁は、大正 2（1913）年、播州鉄道建設時に架けられたもので、左岸側から上路プレートガーダー6 連＋下路平行弦ワーレントラス＋上路プレートガーダー5 連で、全長 319.98m です。レンガ造の橋脚は建設当時のままですが、中央部のトラス（径間長=68m）は、昭和 58（1983）年 9 月の洪水で落橋し、昭和 61（1986）年に架け替えが完了したものです。

播州鉄道は、加古川およびその支流で行われていた舟運を代替する目的で敷設された路線で、大正 2（1913）年 4 月 1 日に加古川町駅～国包（くにかね）駅（現・厄神駅）間（≒7.56km）が開業、同年 8 月 10 日国包駅～野村駅間（≒23.82km）が延伸開業しています。

以後、今日に至る主な経緯は以下のとおりです。

- ・大正 12（1923）年 12 月 21 日：播州鉄道は、経営難から播丹鉄道に譲渡される。
- ・大正 13（1924）年 12 月 27 日：野村駅～谷川駅間（≒17.22km）が延伸開業し、現在の加古川線が全通。
- ・昭和 18（1943）年 6 月 1 日：播丹鉄道が国有化され、加古川線となる。
- ・昭和 62（1987）年 4 月 1 日：国鉄分割民営化により西日本旅客鉄道が承継。
- ・平成 16（2004）年 12 月 19 日：全線が電化される。



写真-2 JR 加古川線・第二加古川橋梁



写真-3 国包の渡しと第二加古川橋梁（畑健夫氏撮影）



写真-4 昭和初期、第二加古川橋梁を渡る蒸気機関車（畑健夫氏撮影）

（写真-3・4 は、いずれも畑啓之氏提供）

■ 国包の渡し跡

第二加古川橋梁から上流に約 400m 行った所の、主要地方道 18 号加古川小野線と同 20 号加古川三田線の交差点付近に「国包渡し跡」があります。

江戸時代、加古川には大坂防衛上の理由から橋が架けられていませんでした。国包は、京都から伊丹へ、そして有馬・三木・志方を通り姫路に至る西国裏街道「湯の山街道」が加古川の舟運と交わる交通の要衝の地にあって、宿場町として栄えていました。地元に残る元文 2（1737）年の記録によると国包周辺には材木屋・大工・桶屋・紺屋・医師・旅籠・川船宿などが立ち並び、人の往来が絶えなかったと記されています。

次頁の『元禄播磨国絵図』の「国包村」と「都染（つそめ）井口村」の間を流れる加古川では、「川幅六十間（≒109m）船渡」の記載が見られるように、高瀬舟による人渡しが行われていました。川幅は現在の 1/3 程度だったようです。

この国包の渡しは、下流の上荘橋が架けられた時点で廃止されているはずですが、木橋であればその後の洪水で落橋し、橋が架かるまでの間、渡しが復活していると思われます。写真-3 を見ると、昭和初期まで渡しがあったようです。

今、渡し場は跡形もなく、加古川の高水敷には写真-5 のような案内板が設置され、低水護岸の天端には写真-6 のような「国包の渡し跡」と刻まれた石板が埋め込まれているだけです。



写真-5 加古川高水敷にある「国包渡し跡」の説明板



写真-6 加古川低水護岸天端に埋め込まれた「国包の渡し跡」の石板

■ 加古川舟運の河岸として賑わう

河岸（かし）は、高瀬舟の舟着場に物資集散機能を担う町場が付随した集落です。舟持ち、問屋、舟乗りが居住し、近隣の村々の生活物資購入の場所でもあったわけです。加古川では、簡易な河岸なら川筋のほとんどの村にありましたが、加東郡上滝野・下滝野・新町・北野・河高（こうだか）・大門・粟生（あお）・太郎太夫（市場）、印南郡国包・芝・里などの河岸は特に賑わいを見せていました。

中でも国包は、湯の山街道が加古川を渡る地にあって宿場町として栄える一方、内陸部と海岸部を結び動脈の役割を担っていた加古川舟運の拠点でもありました。

東西交通と南北交通の交わる交通の要衝であり、加古川中下流の舟着場の中で、とりわけ加古川村、船頭村、国包村に舟持ちが多かったとか。



写真-7 嘉永年間頃の国包川辺実況図（畑東助氏所蔵：『話そうはりま〜加古川の歴史』から引用）

美囊川（みのがわ）と加古川の合流点に近い国包河岸は、位置的に美囊郡方面の物資輸送の中継点でもあったことから、美囊川上流の三木名産の金物や米、海辺で生産される塩などは、三木〜国包河岸との間を陸送されていたそうです。

また、国包は木材、酒米の集散地として栄え、特に加古川上流から筏に組まれて運ばれてくる原木の集散地だったことから、文政8（1825）年頃に木材を製品化する木挽き職人が生まれ、唐箕（とうみ：穀粒の選別に使う農機具）づくりを経て、建具づくりへと移行していきました。

建具などの指物細工が栄え、日本一の木工の里「飛騨高山」に例えて「西の高山」と呼ばれています。出来上がった建具は、加古川・高砂・姫路に舟で運ばれました。

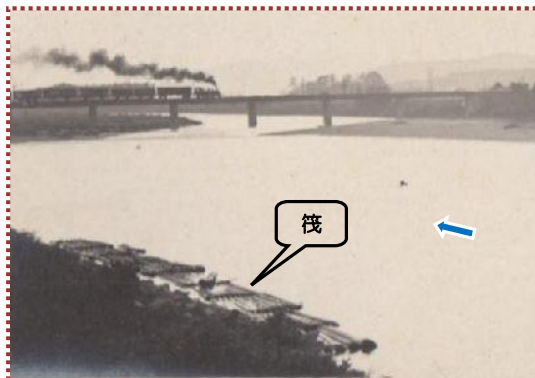


写真-8 手前には接岸中の筏、前方に第二加古川橋梁
（写真：畑啓之氏提供・畑健夫氏撮影）

■ 国包村、嘉禄元年の大水害により一面が河原となる

加古川市の北東部に位置する上荘町は、大字に白沢、井ノ口、国包、見土呂（みとろ）、都台、都染、薬栗（くすり）、小野があります。大部分は加古川の西岸に位置していますが、なぜか国包のみが東岸に位置しています。

『増訂印南郡誌・前編』では、国包村の成り立ちを概ね以下のよう記しています。

「今の加古川が滝野より宗佐（そうさ）の西を船町の方へ流れていた。国包村は、井ノ尻の東、国包渡しの西の所にあったが、嘉禄（かろく）元（1225）年八月の大洪水により川上の堤が決壊したため全村が流失してしまった。村は河床となってしまう、家屋・田畑は悉く河原と化してしまった。その際、本村は出屋敷（新田開拓などでできた集落）に数戸の家構えのあった現在の地に移転し、残りの者は北の山麓に移り今の井ノ尻を形成、ひとつの村ながら加古川を隔てて東西に位置することとなった。」



図-1 元禄播磨国絵図（『加古川市史・第五巻付図』解説）
（『加古川市史』に読む わがふるさと国包』から引用・加工）

前述のように、大洪水によって加古川の流路が変わり、国包の多くの村民は加古川の東に移ったようです。では、元の加古川の流れはどうだったのでしょうか。

図-1 の絵図は、『元禄播磨国絵図』(抜粋)です。国包村を取り囲むようにカーブを描いている加古郡と印南郡の郡界に注目してください。河川を郡界とする事例は多々あることから、おそらくこの郡界線が加古川の旧河道と考えられます。

ここで気になるのが「加古郡」や「印南郡」の成立の時期です。「郡」は、大宝律令成立(710)の時に設置されていて、霊龜(れいき)元(715)年前後の成立とされている『播磨国風土記』には、「賀古郡」(加古郡)の記述がありますが「印南郡」は欠落しているようです。

「印南郡」は、『増訂印南郡誌』中の「印南郡の創置」によると「聖武紀神龜(じんき)三(726)年に初出す、然れども『播磨国風土記』すでに印南郡の記事を載せれば同郡が一郡として分割されて……国郡制置の初であろう。」とあり、諸説あるものの両郡が奈良時代にはすでに成立していたと考えられ、その頃の加古川は概ね郡界に沿って流れていたのでしょう。

■ 長浜屋新六郎、洪水時の避難地「築山」を築く

古くから国包村では毎年のように加古川が氾濫し、家屋や家畜が流され多くの人命が失われてきました。国包の地は、洪水で川上の堤が切れるとどこにも逃げ場がありません。

大坂・中の島で商人として成功し財を成した国包村出身の長浜屋新六郎(畑新六郎)は、洪水の被害に悩まされ続ける郷里の人々を見かねて、洪水の際に避難できる山を築くことを決意、姫路藩に願い出て永代土地を買い受け、私財を投じて宝暦6(1756)年3月に完成させました。加古川市上荘町国包地区に残る小高い丘がそれで、長さ20間(≒36m)、幅11間(≒20m)、高さ1丈(≒3m:実際は約4m)で、周囲には石垣をめぐらせていたようです。この丘は、人の手で築いたことから「築山(つきやま)」と呼ばれています。

また、当時は繰り返される水害のため近郷は飢饉の状態だったそうで、この工事により、多くの貧しい人々が仕事を心得て救われたとも伝えられています。この頃の水害で筆者が思いつくのは「寛延2(1749)年7月の大洪水」です。

丘の上には地元の人々が感謝の気持ちと安全への祈りを込めて建てた築山神社があります。また、創建時に植えられたといわれる推定樹齢260年を超える市指定文化財「国包の榎(えのき)・棕(むく)の樹」があり、2本の榎が1本の棕の木を挟むように生えていましたが、平成24(2012)年4月3日の低気圧による強風により榎1本と棕の木が倒れてしまい、今は榎1本が残るだけです。

榎や棕の木を植えた理由については、避難時の目印になるからとか浸水時にさらに上に登れるように、といった説がありますが、筆者は枝を広げた大樹が、築山神社の社とともに避難した人々を雨風から守るためではないかと思っています。「築山」は、その後の洪水の際には多くの人々や牛馬などの家畜がこの丘に避難したこと数知れず、多くの命を救ったと伝えられています。

図-2 国包周辺の地図





写真-9 築山神社（平成25年5月撮影）



写真-10 築山（平成25年5月撮影）

■ モノローグ

国包の渡しに関連して情報をネットで調べていたら、地元国包の郵便局長をされていた故・畑健夫さんが撮られた国包の風景写真を見つけました。お孫さん（畑啓之氏：筆者とほぼ同年齢）が開設しているホームページに健夫さんが撮られた大正から昭和初期にかけての貴重な写真をアップされていて、そのうちの3枚を承諾を得て使わせていただきました。セピア色の写真から当時の国包の様子が伝わってきます。因みに、参考資料6の編者・畑偕夫（ともお）氏は畑啓之さんのお父さんです。

ミサゴ（鵟）

ミサゴ科ミサゴ属の鳥で、魚を捕食することから「魚鷹（うおたか）」の異名がある。英名は「オスプレイ」で、何度も重大事故を起こして「ウィドウ・メーカー」（未亡人製造器）の汚名が付けられている米軍の統合垂直離着陸機の愛称に使用されている。また、ミサゴが捕らえて岩陰などに置き去りにした魚に潮水がかかって自然に醗酵し、酢漬けのような状態になって旨味が増したものを人間が見つけて食したのが寿司の起源であるとの伝説がある。そのため、「みさこ鮓」の屋号を持つ寿司屋が全国に少なからず点在している。



写真-11 ミサゴ（令和2年5月国包の渡し跡にて撮影）

【参考資料】

- 1 『増訂印南郡誌・前編』 印南郡役所 大正5年
- 2 『加古川市史・第二巻 本編Ⅱ』 加古川市 平成6年3月
- 3 『高砂市史・第二巻 通史編（近世）』 高砂市 平成22年6月
- 4 『高砂市史・第三巻 通史編 近現代』 高砂市 平成26年3月
- 5 『歴史的鋼橋調査台帳〈兵庫〉』 土木学会
- 6 『加古川市史に読むわがふるさと国包』 畑偕夫編 平成15年
- 7 『話そうはりま～加古川の歴史』 国交省近畿地方整備局姫路河川国道事務所 HP
- 8 『ミサゴ・オスプレイ』 ピクシブ百科事典 知恵蔵

※発行：令和3（2021）年7月 『ひょうご水百景』 No.129

改訂：令和8（2026）年7月 『ひょうご水百景』 No.129